

「怖い胸痛と怖くない胸痛」

大北内科・循環器科医院
院長 大北 卓
若松区本町 2 - 10 - 8
電話：771 - 4224

胸の痛み(以下胸痛)があると、心臓からではないかと不安に思われる方も多いようですが、心臓以外(骨、筋肉、神経、皮膚、肺、食道、胃など)による胸痛も多く、心配ないこともしばしばです。そこで、今回は、心筋梗塞の前触れとして重要な狭心症による胸痛の特徴を中心に、心配のいる胸痛と心配のいない胸痛の見分け方についてお話します。

胸痛を起こす心臓の病気の中で、大動脈瘤、心筋梗塞の場合は胸痛が非常に強く、命に関わる重症な病気です。一方、狭心症では胸痛は軽く、狭心症で留まっていれば危なくはありません。しかし、放置すると心筋梗塞を起こしてしまうため、狭心症の段階で適切な治療を行うことは、とても重要です。

狭心症の仕組みが分かると、症状が理解しやすくなります。狭心症は、心臓の血管が動脈硬化によって狭くなるため起こります。血管が狭いと、運動などをした時、一時的に心臓の血液の流れが悪くなります。運動を止めて休むと、心臓の血液不足は元に戻るため、狭心症では、心臓そのものの障害は一般には起こりません。だから、狭心症の胸痛は体を動かした時に一時的に起こり、休むと良くなる。ちなみに、心筋梗塞は動脈硬化の部分が詰まって心臓が部分的に死んでしまった状態で、胸痛はずっと続きます。

急いで歩いている時や階段を昇った時、胸の中央部の広い範囲に、締めつけような、圧迫するような、焼けるような漠然とした痛みが出てきて、立ち止まると良くなる。痛みの長さは多くは十分以内、長くて二十分間。これが典型的な狭心症の症状で、胸痛の起こり方、場所、性質がポイントです。反対に、じっとしている時にも起こる、狭い範囲の痛みで胸の左側もしくは右側、キリとした鋭い瞬間的な痛みであれば、心配のない胸痛が大部分です。今書きました狭心症の特徴に全部当てはまるような方は、狭心症の可能性が非常に高く、病院にかかれることをお勧めします。狭心症の中でも、胸痛が起こり始めて間がない狭心症、胸痛が悪化しつつある狭心症、じっとしている時にも起こる狭心症は、心筋梗塞になる危険性が特に高く、できるだけ早く病院にかかることがとても大切です。

胸痛はありふれた症状の一つですが、心配のないものから心筋梗塞を起こす危険性のあるものまで、ピンからキリまであります。皆様の参考になれば幸いです。